
ワールドエンドによろしく！

嘘月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ワールドエンドによろしく！

【Nコード】

N9669Z

【作者名】

嘘月

【あらすじ】

誰よりも理想主義者な偽現実主義者 彩瀬^{あやせ} 翔生^{かなる} ある日、彼は一人の儂げな少女と出会う。World End 彼女はそう名乗った。翔生を中心に狂いだす世界。何気ない日常を世界の終わりから守る日々が始まる。

World end(前書き)

初投稿させてもらいます。至らぬ点だらけでしょうが、生ぬるい目で見ていただけたらと思います。ご意見は真摯に受け止めたいと思っていますので、何か頂けたらと思っています。よろしくお願いします。

World end

風が吹いた。

少女の髪は流されて、形が無くなる。

酷く醜く人で混雑した交差点を滑らかに、流れるかのように避けながら。

誰かに触れる事なく踊るように、誰かを恐れるかのように慎重に。誰よりも世界を愛した少女が天を仰ぐ。

誰かが呟いた。

「世界が終わる」

そう呟いた気がした。

起立と礼を終えて放課後の教室を誰よりも早く出る。

季節は春から夏へ切り替わり、ようやく夏らしくなってきた7月。

汗ばんだ肌にYシャツという組み合わせは最高に気持ち悪い。

「じゃあな彩瀬^{あやせ}」

「おう、またな」

高校2年生のこの時期は世間が騒がしくて嫌気が差す。

部活のインターハイ？夏に向けて彼女ができました？国立大学目指して受験勉強？

クソくえ

インターハイ行ってもプロになるのは一握りだ。社会の役に立つ？人並みに生きていたら人並みに挨拶も礼儀もできる。

彼女ができた？好きな人ができた？一時の感情に身を委ねて、感情の逃げ場を作ってるだけに過ぎない。結婚前提か？結婚したら本当に幸せになれるのか？

レベルの高い大学に行って満足か？そこでのお前は輝いているのか？くだらない能書きにしか頼れないガリ勉野郎か？

もつと現実を見る、何が効率的か何が利益になるか考えていけ。

……と言っても、主観的にも客観的にも一番損してるしてるのはやつぱり俺だった。

友達を作るのは苦手ではない。年上と話すのも苦手ではない。世間と関わるのも苦じゃない。理想を追い求めるのは誰よりも好きだった。

俺 あやせ 彩瀬 かなる 翔生は、誰よりも理想を追い求めていたに違いない。バスケットボール部に入り、持ち前の運動神経と身長を活かし、チームのエースという座を手にした。

県のチームでは俺を知らない選手なんていなかった。だからこそ、特待生としてこの高校に推薦で入学する事が出来た。

この先俺は何処までも理想を追い求められる、そんな事まで実感していたんだ。

そんな毎日に生き甲斐を感じていた矢先に、バスケットを始めるきっかけをくれた先輩が交通事故で手首を無くした。

彼のシユートフォームはまるで理想そのものだった。

そんな先輩が格好良くて、俺はバスケを始めた。

理想を求めて、何かに打ち込む日々が終わる音。

俺はバスケットなんか好きじゃない事に気づいた。

俺が好きなのは理想を追い求める自分。

理想が朽ち果てた時、その理想を越えたような空虚が襲った。

何か一つを努力なしで終わらせてしまったような、至極極まりない背徳感。

俺なんかよりもずっと素晴らしい選手で、俺なんかよりもずっと将来性のあつた先輩、そんな先輩の両手首から先が空と交わっていた。

沈黙の続く病室の中でこう言われた。

「お前は俺のバスケットをしてくれ、お前は俺だ。最後の希望って奴なのかもしれないな」

その言葉の重みに耐え切れなくなった俺は、逃げるかのようにバスケットをやめた。

わかっていた。先輩の求める理想を追いかけるべきだと。

それが先輩への恩返しでもあつて、先輩が望む理想だと。

理想は何よりもリアルである。

何かを手に入れようとすれば何かを失い、ときには手に入れようとしたものさえ消えてなくなる。

先が見えているなら、最初からしなければ良かった。

理想を失つた俺には何も無かつた。

きっとそのまま続けるといふ選択肢もあつたに違いない。

それをしなかつたのは何故だろうか。

考えたくもなかつた。

高校1年生の冬に、俺は世界とやらを憎んだ。

それがこの捻くれた性格の理由。

これからもきつと、自分の首を絞め続けるだけの思い出になるだけなのだろう。

「なーに辛気臭い顔してんだ！」

「!?!?.....後ろから押すなよ、倒れるとこだったぞ」

「ははは、わりいわりい。どうよお茶でもしないか？我が親友」

「いや、いい」

「そんな気分じゃねえか……じゃあうち来いよ、お気に入りの格闘技見せてやるよ！まじすげえんだぜ！」

こいつ、井上隆二いのうえりゅうじは中学校からの友人で今も同じクラスの腐れ縁だ。俺がバスケットをやめてから心配して余計に絡んでくるようになったわけで、親友なんて大それたものではない。

井上は街の不良5人に絡まれても無傷だった、なんて噂もあり学校ではちよつとした有名人だ。

「お前と格闘技を見たら、俺がお前の技の餌食になるよな？いつも」

「お前もかかってこいよ！その方が盛り上がるだろ！」

「痛いのは嫌いだ。特に脳筋のお前となんて断固拒否する」

「それは残念だ、勉強のし過ぎは体に味噌だぞ？」

「……それを言うなら身体に毒な」

「あ、あー変わらないだろどっちでも」

毒と味噌が変わらないなら日本人は妖怪か新人類なんだが。

「ま、いいや！もう少し楽しく生きようぜ翔生」

「十分充実しているけど？」

「俺の目は誤魔化せねえよ。お前はもつと刺激を求めている。違うか？」

「……お前の目も腐ったもんだな、刺激なんてリスクと同義語だ。自分のリスクになる事なんて望んでいないさ。帰り際に理科実験室で防腐剤でも貰って来い。ちゃんと注意事項読んで使えよ」

「あ、あれえ？そこはもつとこつ……流石俺の親友、やつぱなんでもお見通しだな！的な流れだったろお」

「他人から出直して来い」

「そこから！？」

「……ありがとな」

「んー……そつか、また鑑賞会に誘うわ。じゃあな」

また誘われるのか……そう思いながらもしつかりと馬鹿な友達と別れる。

下校途中の生徒の群れに混じり、何の捻りも無い背景へと身を委ねた。

刺激の強い楽しい人生……か。

そんな人生はたしかに魅力的だ。

ただ、それは成功例としてであつて、必ずしも、そのリスク、つまり犠牲を支払つて絶対に手に入れられる対価ではない。

そんなものには魅力がない。自分が頑張った分だけ落胆するならば、そんなものはただの悲劇でしかない。

酷く捻くれた性格にもそろそろ自己嫌悪し飽きていた。

何か世界を狂わすきっかけもあるはずもなく。

世界を変えたいだなんて妄言に誰も耳を傾けてくれない。

どこまでいっても、結局俺は理想に憧れ続けているだけだった。

いつも通りに騒がしい街の表通りへと差し掛かる。

下を向いて歩くサラリーマン、笑いながら帰る学生、こうして冷静に見るといつももあるのは現実。

裕福な国だ、平和な国だなんて世界で言われているが、結局それは隣の芝生って奴であつて……何が起こつてもきつとこの世界は変わらない。

そう、きつと……何も変わりはないんだ。

「え？」

本物の風景の中に、今何かが”存在”した

たしかに、今非現実的な存在があつた気がした。

ここだと言わんばかりに主張するかのような違和感。

真っ白い髪を靡なびかせて、踊るように人ごみを掻き分けていく。

そんな異質な存在に、誰一人目を向けなかった。

何かに惹かれて、ただその白い軌跡を追うことにした、まだ暑い猛暑を奮う7月の良く晴れた日。

「私の事、見えるんだね」

俺は世界とやらに出会った。

廻り始めた世界

「私の事見えるんだねって……はは、どういう意味だよ」
額から変な汗が出た。

周りの風景は、ただ日常を映して流れていく。

何も変わらないハズだ

現に何も変わっていない。

それなのに身体が震える。まるで白昼にお化けでも見たような。

そう……お化け？

「そのまんまの意味だよ、私に見える人は私を救ってくれる人。そうでしょ？」

通行人が俺達を腫れ物でも見るような目で見る。

いや、正確には”俺”だけを見ている。

目の前の少女……と言っても同じ位な年の訳だが、絶世の美女と言っても過言ではないこの子の方が人目を引くハズなのだが。

どうという訳か、通行人は俺だけを、見ては見ぬ振りして遠ざかっていく。

「なんなんだ……？」

まるで他の人には彼女は存在していないように、この女の子は明らかに現実離れしていた。

「初めまして、世界の救世主さん？私は世界、ワールドエンドと言います。これからよろしくね？」

電波だ、完全に現実を見失っている。この子はどこか頭が可笑しい子なんだ、可哀想に。

「面白い遊びをしているね。でも俺は暇じゃないからまた今度」

「え、ええ！？あ！そっか……えっと……人間にはハルマゲドンって言った方が早いのかな？あれ？あれ？」

「……」

「ひどいっ！！商品裏のバーコードでも眺めるかのような眼差し！？」

「どうやら世界とやらは俗物に染まりきっているらしい。」

「この調子じゃ当然先までこの世界は安泰だ。」

「早める足に必死に謎の少女は付いて来る。」

「信じてください！たしかに今までの危機を救ってくれた方も、最初は似たような反応をしていました。けどあんまりです……」

「俺の他に何人に声を掛けているんだこいつ。」

「あ、あの！聞いてます？無視ですか！？あれ？見えてない？おい！ここですよー！」

「そう言っただけで両手を広げて振り回している。」

「あの……本当に迷惑だからやめてくれよ。君といると目立って仕方ない。同じ学校の人に出会って変な噂が立つのも嫌なんだ」

少女は首を傾げて微笑んだ。

「大丈夫です。私を見えている人は貴方だけですよ？彩瀬翔生さんあやせかなる」

「いい病院を紹介しよ……なんで俺の名前知ってるんだ？」

得意げに目の前の少女は胸を張って答えた。

「彩瀬翔生、17歳。私立こひなみ小波学園2年生、文武両道、バスケット

ボールが仕事の現実主義者」

「え……？」

「小学4年生の頃に両親が海外へ、それ以来一人暮らし。妹は完全寮制の14歳、趣味は暴力」

「おいおい。」

「世界を変えたいと願う貴方の救済を、私、ワールドエンドは承諾します」

「何者だ？この女、俺のことは兎も角、妹の事を知っているのはごく一部のハズ。」

「私はワールドエンド、世界の終焉。人は私を神と呼び、宇宙と呼

び、空気と呼び、歴史と呼び」

少女が白く輝きだす。

その異様な姿にも、歩み行く人々の視線は止まらない。

「世界と呼びます。さあ、手を」

白く伸びた腕が、俺に向かって差し出される。

握ってしまいたくなる美しさに惑わされ……。

手を伸ばそうとした刹那、その手は宙を握った。

「え？」

「え？」

少女は、得体の知れない黒い塊に飲み込まれていった。

「あ、れ？」

たしかに存在したはずだ。

一瞬の事で頭が状況に付いていけない。

「あ、あの！今ここにいた女の子何処に行きましたか！？」

気が動転してか、近くにいた女の子何処に行きましたか！？」

今、目の前で起きた出来事は、とてもじゃないが信じ難い。

すると、通行人の男は変なものでも見るかのように答えた。

「君さつきから一人で何喋ってるんだ？」

……っ！？」

「な、何言ってるんですか……今いたでしょう？一緒に俺と話してい

た……白い髪の毛……綺麗な女の子が……」

白い髪の毛？綺麗な女の子？

果たしてそんな現実離れた女の子が、存在したのだろうか？

男は首を傾げて、これ以上は時間の無駄と察したのか、何も言わず

に去って行った。

日常が崩れていく予感がした。

間違いないイレギュラー。

日常を狂わすだけの出来事を確信した。

それでも。

『これが夢なら』と、そう願えなかった。

「ほんとに……なんだったんだらうあの子」

『現在、樽宮市たるのみやで起きている連続窃盗事件ですが、未だ犯人の消息は掴めていない模様です。警察によりますと、この事件には大規模な窃盗グループの関与が背景にあると見ているようです』

街中のスクリーンが映し出すのは、毎度のごとく同じようなニュース。

女の子、黒い塊、世界の救済

考えれば考えるほど真実味がなく、本当に白昼夢だったのかもしれない。

何とも言い換えられない違和感だけを胸に、ただ帰宅する他なく、
彩瀬翔生あやせかなるの一日は終わりを告げてしまう。

二つの影があった。

一人はフードを被った若い男。

そしてもう一人は、白色に靡^{なび}く腰まであるストレートヘアの美少女。男は少女を大切に扱っていた。

五体満足、拘束もなく、机の上にはたくさんのお菓子と紅茶、部屋は歪^{いびつ}に急いで取り繕ったような、一面のピンク。

呑気に紅茶を飲む少女と若い男を見て、誰がこれを誘拐と思うだろうか。

「ワールドエンドさん、そう気を悪くしないでおくれ」
フードを被った男はひたすら頭を下げる。

「いきなりこんな事をして本当にすまないと思っているよ」

「折角彼に信じてもらえそうだったのに……とんだ邪魔者だよ……」

「僕もこんな場所で”世界の終わり”と出会えるなんて思ってもいなくてね。少し強引でも、こうして話してみたかったんだよ。後悔はしてない」

少女は退屈そうに机の上のお菓子を転がして遊ぶ。

「初対面の人にする挨拶じゃないですね」

「どうも手癖が悪くてね……欲しいと願ったものはなんでも手に入りたいと思ってしまうんだよ」

部屋の隅に飾ってあるのは、どれもこれも高額な品ばかりだった。

「……あなたも能力者なの？」

「まあね、結構上手に使えるようになっただよ、ホラ」

そう言っただけでもない場所から黒い塊を出現させて、更に大量のお菓子を出して見せた。

「空間転移系ね、移動する物体の質量制限は飛び抜けてそうだけど

残念ね、貴方に用はないです」

無関心とソツポを向ける少女にも、男は気にしていないようだ。

「それで私に何の用ですか？」

「あ、ああ！そうだ！そうだとも！」

男は初めて興奮したかのように、初めて感情を手に入れたかのように、目を見開いて話し出した。

「ワールドエンドなんて存在、僕は実際信じちゃいなかった！そんな話を聞いた時から疑っていたさ！だけど違う！実際こうして目の前にしてみると信じてみたくなる。君は一体なんなんだい？」

「私の事を誰から聞いたの？」

少女の顔からは、徐々に余裕が消えていた。

自分を知っている事への恐怖が抑えられないようだった。

「そんな事些細な事さ！僕は君を知りたい、なんで君がワールドエンドなんて呼ばれているのか？何故あの男が君を探していたのかを！知りたい！欲しい！あの男が欲しいが君が欲しい！！」

男はこれまでもなく喜び喘ぐ。

少女は窓の外を眺めた。

どうやら近くに遊園地があるようだ、ゆっくりと回り続ける観覧車を見ながら。

「……………私は……………」

少女は。

「なんだ今の…………？」

頭が痛い。

無理矢理よくわからない映像を見せられたような感覚だった。

時刻は深夜2時、横になってから30分も経っていない。

帰り道での出来事もあり、余計に疲れているのだろうか。

……帰り道？

夢と呼んでいいのかも怪しい夢を思い出す。

白い髪の少女がいた。

ワールドエンド、そう男は言っていた。

急に嫌な予感がした。

でも、何処にいるんだ？

少女の視界、映ったのは観覧車、街のシンボルになっている24時間回り続ける観覧車だった。

あの続きを、少女は何と言うのだろうか。

言いようのない確信を胸に、翔生は家を飛び出す。

目的の場所、樽宮遊園地へ着く。

夢で見た角度を頭の中でトレースする。

近場で、高くない建物、カーテンがなく、部屋の明かりは点いていて、とんでもなくメルヘン一色の……部屋。

「……本当にあった」

3階建ての建物の窓は一つだけ、薄いピンク光が灯る部屋だった。階段を駆け上がり、インターホンを押す。

すぐに男の声がした。

「はい？」

こんな夜遅くにインターホンを押されて警戒している声。

「す、すみません！ちよつといいですか？」

咄嗟に上手い言い訳も出来るはずもなく、曖昧な訪ね方をしてしまった。

ここで扉を開けてもらえなかったらそれまでというのに。

「ちよつと待っていてください。今開けます」

「は、はい！」

すぐに扉が開く。

フードを被った男が現れた。

「!?!?お前!」

勢いよく扉を閉めようとするが想定してる範囲だ。

素早く足を扉に挟めて、閉めれないようにする。

「ちよつと中に入らせてもらいますよ!」

無理矢理に扉を抉じ開ける、腕力では勝っているようで思っていたより簡単に中に入ることが出来た。

男を押しつけ、リビングへと向かうと、そこには。

「あ、あなたは!やっぱり来てくれたんだね」

そこには、優雅に紅茶を飲む数時間前に出会った少女がいた。

「よくわからないけど、あれ見せたの君なんだろ?」

「うん、私が見せました。信じて来てくれるかは半分半分だったんだけどね」

と悪戯に舌を出してウィンクされる。

.....可愛いじゃねえか。

「どうして?」

「助けて欲しいと思ったから」

「知り合いじゃないのか?」

「全然、全く、これっぽっちも赤の他人」

赤の他人に、どうしたらこんな所に連れて来られるんだよ。

「とりあえず、此処から出るぞ」

「あ、うん」

少女は名残惜しそうに、ティーカップを机に置き、机の上のお菓子をワンピースのポケットの中へと仕舞った。

「えへへ」

微笑んでる場合か。

「おいおい、勝手に人の家上がりこんできて大切な客を横取りなんて勘弁してくれよ.....」

夢で見たフードの男は、どうやら冷静さを取り戻しているようだった。

「詳しい事情は知らねえけど、こいつは俺の客だったハズだろ」

「うるさいな……これだからガキは嫌いだ」

男の前に50cm程の黒い塊が出現した。
あまりにも現実離れした異質のものだった。

「なんだそれ……?」

「ん?ああ、知ってる。知ってるぞ。その顔」
愉快なものを見つけたように、男は笑う。

「Chainと出逢うのは初めてかな?少年」

「Chain?」

「世界を繋ぐ者、異能を持つ者はそう呼ばれているそうだ。……たしかに怖い。僕だって他のChainと出会えば怖くなるさ。恥ずかしがることはない、あまりにも現実離れしていて初めて見る奴は皆、例外なくそういう顔をする」

黒い球体が何かを吐き出す。

男はその黒い塊が吐き出した鈍色に輝くものを取り出し近づいてくる。

「んーここら辺じゃこんなものしかないか」

出刃包丁を取り出して。

「まじかよ……」

馬鹿げている、なんでこんな事に巻き込まれているんだ?

昨日まで普通に過ごしていた、ただの高校生でしかない俺が何故こんな目にあってるんだ?

男は目の前で止まり、大きく振りかぶる。

汚れ一つのない包丁が目の前に迫って

「翔生!」

その声と同時に男の腰にタックルをして突き飛ばす。

「ぐっ!?!」

「こっち!」

少女の声のする方へ態勢を立て直して走る。

無意識に手を取って

手を

手が触れた。

「 #

#

」

思考が記号化する。

急に目頭が熱くなり、涙が止まらない。

頭痛は一瞬で、頭の中へ制御できない程の情報量が流れ込んでくる。見たことのない風景、知らない人、学校で習った歴史。

その中に、白い髪の女の子がいた。

少女は一人。

いつも少女は一人で世界を見ていた。

誰かと居ても、誰かと見ても、結局彼女はこの風景を一人で眺めていた。

その姿を見て、救われなと思ってしまった。

救いたいと願ってしまった。

身体が熱い。

意識が戻り後ろを振り返ると、男は倒れたまま。

さつき男を突き飛ばしてから、全く時間が経っていないような気がした。

繋いだ手を離さないようにしっかりと握り、翔生はピンク一色に染まる部屋を飛び出した。

「お前……」

「よろしくね、翔生。私はワールドエンド、貴方は世界を繋ぐ者」
何をそんなに満足なのか、謎の美少女は満面の笑みで俺の手を握った。

「それはもう聞いたよ……」

理想へ

必死に走って逃げても、男が追ってくる様子はない。

冷静を取り戻し、この少女、ワールドエンドに尋ねる事にした。

「なあ、本当にお前は一体何者なんだ？なんであんな意味わからん化け物みたいな奴に誘拐されてんだ？」

質問の内容が可笑しかったのか、少女はくすくすと笑って答えた。

「化け物なんて可哀想に、自虐ネタ？」

「自虐って……俺はまともな高校生なんだが」

「それに、あの能力は汎用（utility）であって、破壊（M
urder）には程遠い出来だったから大丈夫」

「どうやらあの手の奴らには、便利な汎用型の能力と、殺人的な能力と分かれているようだが出来ればマードーとかいう破壊に属する奴には会いたくないな。」

「大丈夫って言っても、一歩間違えたらめった刺しされてただろうよ」

「あ、あー……あはは……そうだよな」

「で？一体お前は何者なんだ？」

「ワールドエンド？」

「そう、それ」

「ん〜そうだなあ……私は世界そのものの姿を体现したもののなの、何百年もずっとこの世界を彷徨う観測者……と違うかな？傍観者の方がイメージつくかも」
「どちらもイメージがつかない。」

「世界のバランスが狂う出来事が起こると、私は私と契約してくれる人を探して世界のバランスを崩す要素を取り除くの」

「それって戦争とか？」

「ん〜ちよつと違うかな？私にもその原因がよくわからないから、まずはそこからなんだけどね」

「信じ難い話ではあるが……あのさっきの黒い塊やら、お前と触れた時に感じたあの意味のわからん感覚、寝てるときに見た映像……嫌でも信じないといけない気がするな」

「そうそう！あの時触れた時に感じたでしょ？世界を」

「どうやら、あの時見たのが世界とやらだった。」

「酷く歪で、狂って、醜悪で、それでいて美しい世界の歴史を。」

「それが契約、私と触れた人が私を繋ぐ」

「ちよつと待て、契約？」

「そう、私に触れる事、そして見る事、声を聞くことが出来るのはChainと呼ばれる特殊な人たちだけ、普通の人々が私に触れちゃうと私の中に取り込まれて、世界の一部としてこの世から消えてなくなってしまうからね」

「そいつはトンデモ設定だな……待て待て。」

「俺は何もないぞ？特殊な能力なんてないし、何か起こった身に覚えもない。特殊な性癖だつてない」

「後者は嘘だけだな！」

「私を見る事が出来た時点で、それは特殊なんだよ？そしてそれを私は救世主と判断するの」

「た、ただの偶然だ」

「そう、ただの偶然、だけどそれが重要な。世界を繋ぐなんて偶然の産物でしかないしね。そして私と触れた瞬間、翔生はChainになった」

「は？」

「その能力が何なのかわからないけどね。でも安心して！歴代の人たちはとっても強い人達ばかりだったから。きっと翔生も例外でないハズ！！」

「そんなに目をキラキラ輝かせて、期待の羨望で見られても困るんですけど。」

「そんな触れただけで契約って……さっきの男とはどうだったんだ？」

「それは私の意志が働くからね。選ぶ権利くらい私にだってあるんだから」

そう言つて少女はポケットから先ほど拝借したお菓子をとり出し、袋を開けて口に運ぶ。

「うん！美味しい！やっぱりビスケットはいつの時代も絶品ね」

「で、俺はどうしたらいいんだ？」

「世界をしゅくいま……しよ」

口の中にあるものを飲み込んでから喋ってくれ。

「世界を救いましよ！」

言い直した！？

「具体的に何をすればいいんだよ。心の準備だつて必要だし……正直8割以上理解出来ていない」

「うーん、まずは私を知っている人がいるつて事自体がイレギュラーだから……さっきの男とそれを教えた男を探し出す事かな」

俺を殺そうとした人を探して、わざわざもう一度殺されに行くのか。「次は殺されるかもしれないぞ、さっきのは何とかなっただけで」

「大丈夫大丈夫！」

「世界世界つて自分で言つてたけど、お前だつて元は人間だつたんだろ？」

「うーん……」

少女は少し考え。

「忘れちゃった」

と笑顔で答え。

俺には、その笑顔が何だかとても痛々しかった。それにしても……不自然。

あの時、あの男が帰り道の時のように同じ能力を使えば簡単に追いついてこれるはずだ。

帰り道、黒い塊の中に自分も入れて移動していたに違いない。となる。

「迂闊に家に帰ってないで正解だったのかもしれないな」

「え？」

かなりの遠回りをして、近いうちに大きなショッピングモールが出来る噂の人一人いない工事現場へ移動した甲斐があった。

黒い塊が目の前から出現し、中からフードを被った男が現れた。

「わざわざこんな人気のない場所にすまないね」

右手にはさつきと同じ包丁を持っていた。

「やっぱり付いて来てたのか、お前ワールドエンドをどうするつもりだったんだ？」

「どうもこうもないよ、僕はただのコレクター。今この街で話題になっている連続窃盗事件も僕の仕業でね……欲しいという衝動から逃れられないんだ」

「欲しい？ただそれだけの為に？」

「本当にすまない。謝罪の気持ちでいっばいだけど……君を殺してもソレが欲しいんだ。僕よりたくさん色々なものを持っているあの男を越えるにはソレしかない」

「その男つてのは誰なんだ？」

「かくみ神代と名乗ってたな、一度しか会ったことないからそれ以上は知らない。だが、あの男は異質だった。その男が欲しいがるソレを譲ってくれっ！！！！」

男がナイフを両手で握り締め、走ってくる。

「らあああああああ！！！！」

あまりにも不手際でいて、大胆。

避けることは容易い。

ただ、避けた時に気付く、後ろに下がらせたワールドエンドがいた事を。

「あ」

ズブリ、と今まで聞いた事のない音が響いた。

少女の細い身体には禍々し過ぎる一刺し、月夜に照らされながらくの字に少女は痙攣した。

断末魔すら無く、身体を貫いていた刃物を引き抜かれてからは、糸

の切れた人形のようにだらしなく倒れこんだ。
触れた時に見た少女の記憶を探る。

救ってあげようと思ってしまった自分のなんて愚かさ、無力さ。
嗚呼、俺は結局は何が起こっても、何かが起ころうとしても無力だ。
それと同時に湧き出る怒り、これを怒りと呼ばずに何と呼ぶのだからか。

出逢って間もない人の為に、俺はこんなにも想ってやれるんだ。

「ははは………ほんとにやってやったぞ……くくく、あははははははは……！」

笑い転げる男を余所に、頭の中では目前のフードを被った男を殴り飛ばす事ばかりイメージしていた。

想像の中の自分は有り得ない速度で走って男を殴り、その衝撃で昔よく見た特撮の悪役みたいに吹っ飛ぶんだ。
それが理想だった。

『理想到達』

結論から言うと、どうやらそれが俺のChainとしての力だった。

走る、走る。

自分でも信じられない速度で一瞬にして男と距離を詰める。

理想と違うのは相手が動く事と考えたが、そのスピードに反応しきれない男は動く事も出来ていないようだ。

「なっ!?!」

男が言葉を発する前にすでに拳は男の腹にめり込んでいた。

そのまま男は後ろにある砂場まで吹っ飛び倒れた。

「なんだ今の……?」

「それが翔生の能力」

今日一日ずっと聞いているような声がした。

「生きてんのか？」

駆け寄り刺された傷口を見るが損傷はない。

「私は世界そのもの、これくらいの干渉じゃ大丈夫だけど……」

ワールドエンドはフードの男の所まで歩み寄り、その男の胸の上に手を置いた。

「世界に何らかの干渉をしてしまった彼は残念だけど、この世界から退場だね」

男は薄い光の結晶となって、少女の身体へと吸収されていった。

「何やったんだ……？」

「世界を脅かした危険分子として、ワールドレコードという記憶媒体に登録されてしまったの、彼は」

「ワールドレコード……？」

「世界の記録、ブラックリストとも言えるし、宗教的概念だと輪廻と呼んだり、生まれ変わるなんて表現のされ方もあるね」

「死んだって事か？」

「それは直接的な言い回し過ぎるけど、そうだね。そういう事になるのかな」

「そんな……残酷すぎる……」

「そう、残酷。とても残酷なの。だからそれを覚えているのは私だけだよ」

この顔だ。

『私だけが知っている』そういう顔を、触れた時にも、あの夢の中でも、何度も、見た。

夢の中で聞いた『私は……』その先に続く言葉を自然と予感していた。

「私はワールドエンド、この身体は墓場。森羅万象を世界という名の墓場に隠す秘密の器なの。そしてその世界の危機という事は、近いうちにこの世界の理が乱れ、この世界が消えてなくなってしまう恐れがあるという事」

世界を救うなんて改めて普通じゃない。

だけど、自分だけにしか出来ない事を見つけてしまった。

これは特別な事であって、とんでもなく、現実主義から程遠い。

さっき手を握った時に言わなかった言葉を少女へ贈った。

「よろしくな、ワールドエンド」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9669z/>

ワールドエンドによろしく！

2012年1月2日02時48分発行